mono CONTENTS

2022 10-16 No.902 ©WPP（禁・無断転載）
AD・表紙デザイン:若山トシオ　表紙写真／MOTO GUZZI
DTP：ベイス、ナギ

［特集］遠乗りしたくなる季節到来！ P34

みんなのバイク 特集

P36　話題のバイク5選
P41　スポーティーな日常を突き進め! ヤマハX FORCE
P44　2022ネオクラ列伝
P48　華麗なるイタリアンコラボバイク
P50　チャオ! 美形のイタリアンバイク
P53　山下晃和のヤマハ「テネレ」で行く、ソロキャンプツーリング

P57　［バイク特集内企画］鉄馬のブーツ
P58　コレクターのお宅訪問
P60　アイアンレンジャーが愛用したブーツ
P61　鉄馬にはレザーブーツがよく似合う
P62　本格ツーリングブーツ
P64　普段使いからツーリングまで!

P66　BMW MOTORRAD DAYS JAPAN 2022 LIGHT
P68　アジアの疾風
P70　最速の猛者に跨る SUZUKI Hayabusa
P72　電動TUKTUKであの街へ

P74　ハーレーダビッドソン ブルスカ復活!!
P76　KTM、攻めのラインナップ
P78　タイガー安室の現場直行!! e-TRAIL PARKを体験!
P80　未来の乗りモノ「EO1」乗り比べ!
P82　ハスクバーナ・モーターサイクルズの世界
P84　レジャーバイク最前線
P86　GASGAS SM 700 & ES 700 ストリートにニューキャラ誕生!!
P88　美しさは細部に宿る
P90　AGV×DAINESE　絶対イタリア!
P92　個性派ピレリが愛される理由
P94　バイクギア三種の神器
P96　雨の日はプラモ作り
P98　だからバイクはやめられない。

特集担当者のおすすめ!

電動TUKTUK「ZINMA」は普通免許で運転できるトライクの一種。3輪だから安定感は抜群で操作も簡単。普通自動車と同じ駐車スペースに留められるから買い物にも便利で、最近では子供の送迎を目的に主婦たちからも大人気とか。家庭充電はもちろん、急速充電できるスタンドも増えつつあるいまこそ買いかも!? 詳しくは72ページまで。

編集部より◎商品は取扱説明書に従って正しい使い方をしてください。
掲載価格は税込みの価格です。実勢価格は編集部調べの価格です。
◎次号のモノ・マガジンは2022年10月15日（土）発売です。

mono

CONTENTS.2

2022 10-16 No.902

今月のイチ押し!

レッドウィングの新作ブーツ『アイアンレンジャー』がイチ押し！　スタイリッシュなシルエットとカラーが目を引く一足だが、その名の由来とは？　いちばんの特長である「キャップドトゥ」とは？　詳しくはP.60を読んでほしい。

【巻頭企画】これが大人のデニム道! …… 010

日本ジーンズの矜持

こだわりある大人の自由なパンツという価値とポジションを築いたジーンズ。
今こそ大人デニムの自分語りを楽しみたい。日本に数あるジーンズブランドの名品と、
唯我独尊のデニム道を極める注目品をセレクト。すべては、いつまでもジーンズの似合う男であるために。

【バイク特集内特別企画】 …… 057

鉄馬のブーツ

ライディングブーツはバイクに乗る上で重要なアイテムだ。その種類は豊富で、伝統的なブーツから
ツーリング用のスポーティなモノまでそろっている。本特集では、様々なシーンに合わせた
ライディングブーツ＆シューズを紹介していく。キミの鉄馬にふさわしい一足を見つけよう！

【特別企画】シリーズお江戸お洒落 …… 104

たなくひあはせ

天明四（1784）年、上野の某寺で世にも稀な展覧会が開かれた。大名家の子息から、文人、役者、遊女まで、
さまざまな階層の人びとが、「手ぬぐい」に思い思いのデザインをほどこし、妍（けん）を競った。
その展覧会図録である『たなくひあはせ』を鑑賞する。

mono編集部のモノ差し …… 007
モノ進化論 …… 028
ジンデポ …… 030
う〜ん、うなるモノ …… 032
たかみひろしのシネマショウ …… 111
monoの大捜査線 …… 112
怪奇骨董新書箱 …… 122
今月のもう一杯 …… 124
織本知之の電子寫眞機戀愛 …… 126
ふかさわ人のコレ、ダレが●●したの? …… 128
新製品情報 …… 130
シロラボ …… 132
モノ・ショップ新聞 …… 136
インフォメーション …… 138
バックナンバーリスト …… 139
次号予告 …… 140
モノ・ショップジャーナル …… 141

編集部より◎商品は取扱説明書に従って正しい使い方をしてください。掲載価格は税込みの価格です。実勢価格は編集部調べの価格です。◎次号のモノ・マガジンは2022年10月15日(土)発売です。

特集 日本ジーンズの矜持

エドウイン 61年目のデニム道

1961年のブランド誕生以来、常に日本人にとってのど真ん中ジーンズを追求し続けてきたエドウイン。ジャパンデニムの筆頭ブランド、61年の歴史から垣間見えてくる究極のスタンダードジーンズの在り方とは？

日本のジーンズを創り今も進化させる

米軍払い下げ衣料品の卸から始まったエドウイン。当時の米国製ジーンズは硬い、縮む、色落ちする、そのうえ高額と幾つかの不都合を抱えていた。もっと日本人の体型にあった穿きやすいジーンズを手頃な価格で提供したい。そんな想いが原動力となった。1961年にエドウインブランドを設立し、'63年発売の「359BF」でワンウォッシュ加工を開発。一度洗うことでジーンズに快適な穿き心地と安定性をもたらすワンウォッシュ加工は、以降のジーンズづくりで定番プロセスとなった。ヴィンテージで語られることも多いデニムだが、エドウインの歴史を振り返るとレギュラージーンズも奥が深いことに気づく。レギュラーはその時代のベストモデルだが、時代特有のニオイや顔が如実に表れるからだ。そこに紐づくのがエドウインの加工技術の歴史。'70～'80年代生まれのオールドウォッシュやストーンウォッシュ、'97年発売のド定番「503」に当初使われていた“液アン加工”もその筆頭だ。いずれも当時のスタンダードという立ち位置は変わらないが、常に進化を続け時代の顔として登場している。そして現在のエドウインの最先端スタンダードが、リサイクルデニム生地「CO：RE」をはじめとするサステイナブルなスペックだ。取り組み自体も基本、すべて自社完結と、実はかなり凄いコトをやってのけているのだが、それを声高に主張しないのもエドウインの真骨頂。時代のスタンダードを追求し続ける彼らからすればイマドキ、フツウに搭載していないとダメでしょ、ぐらいの感覚かもしれない。ジーンズづくりの既存概念にとらわれず、時代のニーズに合わせどの方向にもアップデートしていくニュートラルな姿勢。それこそがエドウインの凄みだ。

359BF

当時の米国製ジーンズの問題点を解消すべく、生地から一貫してオリジナルのコンセプトを持った国産オーセンティックジーンズ。このモデルでエドウインが考えるスタンダードの骨格となるワンウォッシュ加工が生まれた。

パネルカットフレア

ジーンズがファッションとして広がるなか、中古加工の前段階としてデニムのパッチワークを施したフォークロア調デニム「ストロング　ジーンズ」も登場。

オールドウォッシュ

古着独特の色落ちをハンドメイドで再現した中古加工ジーンズ「オールドウォッシュ」が人気に。ここからエドウインの中古加工技術の躍進が始まる。

アメリカンベーシック

日本国内ジーンズ売上No.1を達成。ヒップに適度なハリがあり、シワができにくい「アメリカンベーシック」はロングセラーとなる。

ロンドンスリムストーンウォッシュ

石とミキシングマシーンによる中古加工「ストーンウォッシュ」を施した「ロンドンスリム」は、1981年欧米発売を機にエドウインの世界進出の布石に。

505

旧式織機のセルビッチデニムなどのディテールと現代的なワイドシルエットを融合した“ニューヴィンテージ”「505」を発売し、大ブレイクを果たす。

503

コットンを最良の状態に改質する“液アン加工”を世界で初めてジーンズに採用し、はきやすさを極限まで高めた究極のベーシック「503」シリーズ発売。

ジャージーズ

ジーンズの可能性を広げる新たな創造を展開。ニットデニムによるスウェットパンツ感覚の柔らかな穿き心地で大ヒットした「ジャージーズ」もその1つ。

デニスラ

新しい生活様式に合わせ、オンオフに大活躍のビジネスデニム「デニスラ」発売。スマートなレッグラインと色褪せしにくい新開発ニットデニムが大好評。

1970年代の広告

NEW CHALLENGE

2022 CO:REとは何か？

ジーンズを資源として活用することで環境負荷を減らす未来のための循環型ジーンズプロジェクトの一環としてエドウインが取り組んでいるのが「CO:RE」だ。プロジェクトは2019年に始動。少量展開では意味がないという考えから、約2年超をかけて今年フルリニューアルしたエドウインの定番「NEW503」の全モデルに、クラボウ社L∞Plusとの協業により開発したリサイクルデニム「CO:RE」を採用。その原料になるのは自社工場から排出された裁断くずや直営店などを通じてユーザーから回収した穿かなくなったジーンズなど。回収から再生まで自社完結している点もキモだ。

問 エドウイン 0120-008-503 https://edwin.co.jp

文／下川冬樹

KAWASAKI Z650RS

力強く、軽快なレトロスポーツ

バイクはやっぱりネイキッド、しかも気負わず乗れるネオクラシックなら最高！そんな思いをかたちにしたのがカワサキ「Z650RS」なのだ。

文／山下 剛

その名が示すとおり「Z650RS」は、「Z900RS」の弟分のようなネオクラだ。排気量、パワー、サイズ、重量、いずれもひと回りコンパクトで軽く、とても扱いやすい。だから気軽に乗れるし、肩肘張らずに走れるから疲れにくい。

このコンセプト、実はモチーフとなった'76年発売の「Z650」と同じなのだ。ただしこちらは直列4気筒を搭載しており、ザッパーと呼ばれたこのエンジンはボアアップなどの改良を重ねることで「ゼファー750」にも採用され、ファイナルとなった'07年までの31年間も生産され続けたのだ。

こうしたロングランは、「Z650RS」に搭載されている水冷並列2気筒エンジンにも通じている。ルーツを辿ると'85年まで遡るから、なんと37年！　ルックスだけでなく、エンジンもカワサキの伝統の域に達しているのだ。

ルックスだけでなくエンジンもネオクラ

数々のカワサキ車に搭載され、熟成が進んだこのエンジンは全域で扱いやすい特性だが、とくに中～高回転域の吹け上がりがよく、パワーも充分。車体の軽さも相まって、スポーツバイクの面白さを存分に味わえる。それでいて「速く走らせなければ」と思わせるプレッシャーもない。

ミドルクラスの醍醐味を凝縮したような魅惑のネオクラだ。

指針式の速度計と回転計。中間にはギアポジションや燃料計を示す液晶パネルが並ぶ。

丸型ヘッドライトと砲弾型メーターは、ネオクラネイキッドの象徴的なパーツだ。

◀Zらしい曲面の燃料タンクは、容量よりも美しさを優先。サイドカバーとの一体感も秀逸。

2人乗りも快適なダブルシート。肉厚は充分にあり、長距離走行も快適に楽しめる。

KAWASAKI Z650RS
車両本体価格101万2000円
全長2065㎜×全幅800㎜×全高1115㎜（シート高800㎜）。重量188kg。エンジン型式：水冷並列2気筒/排気量649cc/最高出力68ps/最大トルク63Nm。
㈱カワサキモータースジャパン
0120-400-819

Everyones Motorcycle みんなのバイク

YAMAHA TMAX560 ABS

さらに向上したスポーツ性能

“マキシスクーターの王様”としてヨーロッパでは絶大な人気と地位を誇っている「TMAX560」。その理由は、ビッグスクーターらしからぬ卓越したスポーツ性能にあるのだ。

文／山下 剛

俊敏な走りとともに質感もアップ

ヤマハ「TMAX」の開発コンセプトは「オートマチックスポーツコミューター」。これを言い換えると、通勤・通学や買い物に便利なスーパースポーツとなる。

このコンセプトがヨーロッパ、とくにバイクレースが盛んなイタリアとフランスで大ヒット。初代「TMAX」が登場した'01年から'22年までの間に7度のモデルチェンジをするほどユーザーの要求も注目度も高いマシンなのだ。

そんな「TMAX560」の最新式は、ルックスを一新するとともに軽量ホイールを採用することで俊敏なハンドリングがさらに洗練された。それに合わせて前後サスペンションもセッティングを変更。ライディングポジションはよりスポーティとなり、鍛造アルミ製のハンドルは質感もよく、走らせるたびにニヤリとさせられる。

電装系も大幅にアップデートされた。メーターは大型7インチフルカラー液晶で、スマホとの連携も可能。使い勝手のいいスマートキーのほか、電源、ステアリングロック、シート開閉を行えるセンタースイッチを備える。

振動が少なくパワフルなエンジンと、高剛性で軽量なアルミフレームが作り出す走りには、異次元の上質さを感じられるはずだ。

YAMAHA TMAX560 ABS
車両本体価格136万4000円
全長2195㎜×全幅780㎜×全高1415㎜（シート高800㎜）。重量218kg。エンジン型式：水冷並列2気筒/排気量561cc/最高出力48ps/最大トルク56Nm。
㈱ヤマハ発動機
0120-090-819

シャープな印象のLEDヘッドライトを包むカウルは、エアロダイナミクスを意識したスポーティなものだ。

多機能メーターの操作は左スイッチボックスのジョイスティックを使う。操作性は良好。

スマートキーを携行した状態でセンタースイッチを押すことで電源やロックを操作可能。

前後に延長されたシートは2人乗り時の快適さを向上。幅を絞った形状で足つきもいい。※シート画像は上級モデルの「TMAX560 TECH MAX」。

アイアンレンジャーが愛用したブーツ

鉱山で働く鉱夫たちの足を保護していた〝キャップドトゥ〟ブーツがリファインされて登場！その高い機能性は、バイクのライディングブーツとしても応用できる。スタイリッシュなデザインはオンオフ問わず活躍しそうだ。

写真／熊谷義久　文／モノ・マガジン編集部

8番ラストを採用し、ゆったりとして履きやすい。足先は革を二重に縫い付けたキャップドトゥ仕様。

スッキリとしたデザインなので、ジーンズほかカジュアルなスタイルともマッチする。

Everyones Motorcycle みんなのバイク

レッドウィング
No.8087
アイアンレンジャー
価格5万710円
㊐レッドウィング・ジャパン
☎03-5791-3280
https://redwingheritage.jp/

バイクブーツにも最適 伝統的なキャップドトゥ

レッドウィングといえば、ハンティングブーツのアイリッシュセッターが有名だが、そのルーツはワークブーツだ。ポストマン（郵便配達）、ガレージマン（自動車修理工）、ラインマン（電線工）など、現場仕事人の名前がそのまま付けられているモデルが数多い。中でもさらに高い機能性を持っているワークブーツが『アイアンレンジャー』だ。アイアンレンジャーとは、レッドウィング社があるアメリカ・ミネソタ州北部の鉱山地域「アイアンレンジ」で働く鉱夫たちのこと。彼らは自分たちの足を守るため、つま先にもう一枚革をかぶせて、二重にして強化した「キャップドトゥ」というブーツを愛用していた。現在の安全靴の標準仕様であるスティールトゥが普及すると共に減っていったが、一部のスティールトゥ・ブーツは、当時のキャップドトゥのデザインを1990年代まで保っていたという。そんな伝統的なキャップドトゥのデザインをリファインして生まれたのがこの『アイアンレンジャー』なのだ。

ワークブーツらしいゆったりとした設計で履きやすく、ソールはグリップ力に優れたビブラムのミニラグ・ソールを採用。アッパーには、起毛面を外側に用いるラフアウトレザーを使用。擦り傷に強く、雨にも強い耐久性を持っており、バイクのライディングブーツにも最適。独特の風合いとスタイリッシュなグレーカラーは、街歩きでも活躍しそうだ。伝統的な仕様とキレイ目なデザインが融合した『アイアンレンジャー』は、鉄馬にこそ相応しい。

BOOTS

鉄馬にはレザーブーツがよく似合う

バイク乗りの憧れといえば、エンジニアブーツを始めとするレザーブーツ。長く履き続けることによって、徐々に自分の足に馴染んでいき、レザーの輝きも増していく。バイカーと共に成長していくブーツなのだ。

文／モノ・マガジン編集部

プルアップレザーで防水性と通気性を両立

ベルスタッフ
エンデュランスモーターサイクルブーツ
価格6万1600円

耐久性に優れたフルグレインのプルアップレザー（オイルが多い革）を採用。防水性と通気性を兼ね備えたメンブラン（フィルム）が内蔵されており、雨天でもブーツ内への水の侵入を防ぐ。サイドジップなので着脱もスムーズ。ソールはビブラム製。
㊐モトーリモータ ☎03-6226-2515

ドレッシー＆クラシカル“開拓者”という名のブーツ

ビルトバック
Lot.603 エンジニアブーツ“ザ・パイオニア”／グイディ・ホースバット －ブラックバックルー
価格12万9800円

モーターサイクルブーツ創生期をコンセプトにしたブーツ。ドレッシーでクラシカルなフォルムと立体的なアーチとヒールが特長。アッパーは独特の光沢感を持つグイディ社製のホースバットを使用。今年からヒールカウンターをサイズアップし、さらにフィット感も向上した。
㊐アトラクションズ ☎03-3408-0036

サイドジップで履きやすい全天候型モデル

ベルスタッフ
デュレーション
モーターサイクルブーツ
価格5万9400円

サイドジップタイプの全天候型モデル。ビブラムソールで両足首を保護するプロテクターが内蔵されている。アッパーにはフルグレインレザーを採用し、使い込むほどに味わいが増していく。レザーの内側には防水・透湿フィルムのメンブランを装備、ムレを防ぐ。
㊐モトーリモータ ☎03-6226-2515

育てる過程も楽しいシンプルなペコタイプ

ロアーズオリジナル
ペコスタイプブーツ
価格7万9200円

本格的なつくりながらも、ゴツくなり過ぎないシンプルなデザインのペコタイプブーツ。表レザーには厚め（1.4㎜）の牛革、裏地は豚革を使用している。最初は履きづらいかもしれないが、だんだんと足に馴染んでくる過程が楽しい。つま先は硬い芯材によって保護されている。
㊐ロアーズオリジナル ☎03-6434-0961

電動TUKTUK（トゥクトゥク）で、あの場所へ。

環境にやさしく音も静かということで、ホテルやゴルフ場、観光地などで、続々と採用されるEVカー。なかでも3輪タイプは小型で取り回しもラクときている、いま注目のカテゴリーだ。そんな一台「ZINMA」に試乗した。

写真／熊谷義久　文／モノ・マガジン編集部

風を感じて走りは快適、狭い道でもスイスイと!?

「電動のTUKTUK（トゥクトゥク）があるんですけど、試乗してみませんか?」と、バイク特集の企画打ち合わせ中、メインライターであるタイガー安室氏。

そのひと言から、昔ジャカルタの街で「バジャイ」という3輪タクシーを値切りに値切って乗車した記憶がよみがえった。

「5000ルピアならいいよ」と運ちゃん。「500ルピアなら乗ります」と大胆な金額を提示するワタシの妻。「それじゃ、ガソリン代にもならないよ……」と苦笑いの運ちゃん。なんだかんだと値切りして乗車した3輪タクシーは、かなりスリリングな体験だった。なにせ交通量は多いというのに信号はほとんどなく、早く突っ込んだ方が道の優先権を得る。車線変更も横のクルマを手で制してハンドルを切る。最初は乗るんじゃなかったと後悔したものの、だんだんと楽しくなってきて、いまではいい思い出だ。

「それやりましょう!」と即答したのは言うまでもない。

早速、輸入会社のひとつであるEVランドに連絡。「ぜひ乗ってみてください」との返事をいただき、まだ暑さが真っ盛りの9月のとある日、貸出車両のある渋谷区松濤に集合したのだった。

本日試乗する車種は「ZINMA」というモデル。前1輪、後2輪という、まさにTUKTUKと同じ構造の3輪車だ。バイクではなくトライク登録なので、普通免許をもっていればヘルメットなしで運転できる。しかも、車検や車庫証明も不要という。

まずは、担当の方に操作の仕方を教えていただく。スマートキーでロックを解除し、ブレーキレバーを握ったまま電源ボタンをオン。シフトはドライブ、ニュートラル、リバースの3種類。パネルにはバッテリー残量、スピード、走行距離が表示され、リバースに設定すると、バックモニターに切り替わるのには感心した。右手のハンドルには高速と低速のギアスイッチがあり、高速だと最大で45キロほどのスピードが出る。スタートは右手のスロットルを手前に回し、ブレーキは左右のハンドルのブレーキレバーを握ると作動する。ちなみに3輪ディスクブレーキ。フロントガラスにはワイパーと曇り止めの送風装置も付いているから、雨の日でも安心だ。では出発ということで、運転は安室氏に任せ、後部座席へと乗り込んだ。今日のワタシはインドネシアから来た観光客という設定なのだ。

われらのTUKTUKは松濤の街中から快調に出発し、渋谷駅を抜けて新宿方面に。TUKTUKなのだから、やっぱり東南アジアが感じられる場所ということで、都内某所を目的地に設定した。

目抜き通りを走り抜けるTUKTUKは快適そのもの。信号待ちのときこそ暑さが堪えるが、走行中は風を感じて全然気にならない。後部シートはふたりが座れるので、ひとりなら余裕のスペースだ。

TUKTUKは、いよいよ都内のディープスポットに差しかかる。「この一方通行に入ってよ」と路地を指さすワタシ。「えっ、マジで」といった表情の安室氏。平日なのに大混雑する路地を、人を避け恐る恐ると侵入するTUKTUK。モノ珍しそうな視線を投げかけてくる人たち。怪訝そうに前を横切る地元老人。道路わきのテーブルから、手を振ってくれる若い女性。こわばった笑みを返す安室氏……。

普通のクルマだったら、まず入る気など起きそうにない路地だって、TUKTUKなら行ける。排ガスは出ないし、音も静かだから、周囲の人たちにあまり迷惑はかからない。これこそが、この3輪車の最大の強みなのである。

都内を乗り回すこと約3時間。返却時には30%ほどしか電池を消費していなかった。街乗りがメインなら、試してみる価値はある。

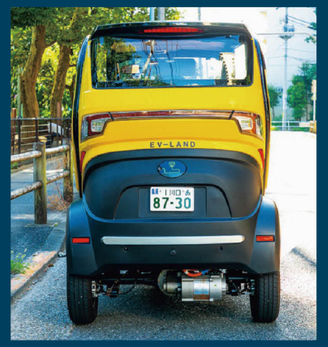
全幅1mちょいだから、小さな飲食店や土産物店の並ぶ都内某所の狭い路地でもこの通り。

狭い路地でもTUKTUKなら行ける

アジアな街こそよく似合う

大型のフロントガラスなので視界も良好。操作も簡単なので、初めての運転でもすぐに慣れる。運転席のシートは前後移動も可能なリクライニング式だ。

USB差込み口やBluetooth機能など装備はクルマ並みだが、運転方法はバイクに近いというのが何ともユニーク。全長2160×全幅1150×全高1680㎜。



充電は家庭用100V電源に対応し、専用充電器を車体後部の充電口に差し込むだけ。リン酸鉄リチウムイオンバッテリーを搭載したハイエンドモデルなら、フル充電で約100〜120㎞の走行が可能。

レトロフューチャーなデザインが愛らしく、運転はバイクのハンドルを採用していて操作も楽々。少々ハンドリングが重めも最高速が45㎞/hなので問題無。電動特有のパワフル&静かな走りを味わえ、旅行気分で街を楽しめる一台ですね。（タイガー安室）

後部座席でのんびりしていただけじゃなく、もちろん運転してみましたよ。以前乗車したスポーツタイプのトライクよりも、操作は簡単。車高も高いから不安なく運転できました。皆さんもぜひ試乗してみてください。おススメです。（ワタシ）

ZINMA（ジンマ）／価格77万円（スタンダードモデル）、104万5000円（ハイエンドモデル）問EVランド http://www.ev-land.jp/

Everyones Motorcycle みんなのバイク

Publisher
今井今朝春
Kesaharu Imai

Editor-in-Chief
前田賢紀
Takanori Maeda

Deputy-Editor
関谷和久
Kazuhisa Sekiya

Managing-Editor
松崎薫子
Kaoruko Matsuzaki

Senior-Editor
小川太市
Taichi Ogawa

Editor
小野正章
Masaaki Ono

大谷 暁
Satoru Otani

片岡静香
Shizuka Kataoka

加藤文晶
Fumiaki Kato

友井健人
Taketo Tomoi

竹本 泉
Izumi Takemoto

薮崎 大
Dai Yabuzaki

Directing Editor
土居輝彦
Teruhiko Doi

Art Director
若山トシオ
Toshio Wakayama

Designer
フェイヴァリット・グラフィックス
favorite graphics

伊藤たまお
Tamao Itou

Staff Photographer
鶴田智昭
Tomoaki Tsuruda

青木健格
Takenori Aoki

Advertising Director
坪井一雄
Kazuo Tsuboi

鈴木敏弥
Toshiya Suzuki

Production Director
小川俊介
Shunsuke Ogawa

Circulation Manager
笹川裕史
Hiroshi Sasagawa

Print
Dai Nippon Printing Co., Ltd.

DTP
Base, Nagi

ワールドフォトプレス総合サイト
モノ・マガジンweb に遊びにきてね!
https://www.monomagazine.com/

SNSでも新鮮情報発信中! フォローしてね!
https://www.facebook.com/monomagazine1982/
https://twitter.com/monomagazineweb/
スマホでもモノ・マガジンが読める
「dマガジン」「楽天マガジン」「ビューン」をチェック!

NEXT
次号予告

総力特集

アウトドアウエアとギア!

機能重視の最旬ギアボックス

ファッションもギアも丸ごと機能重視。カラーはオリーブやカーキなどミリタリー色が俄然人気だ。ボックスは簡単に折りたためるモノからポケット付き、両開き蓋、冷凍も可能な保冷バッグなどまさに百花繚乱。乗り物とも親和性が高く、アウトドアにインドアにと使えるファンクションギア。選りすぐりの最新ギアをお届けする。

特集

最新&定番ベストバイ!

自転車生活モノ図鑑

運動不足の解消ツール、手軽なレクリエーション、密を避ける移動手段として自転車が人気を集めているのは周知のとおり。「だったら欲しい」と思うのは自然の流れ! そこで、本特集では最新&定番の自転車はもとより、変化球的なキワモノ自転車にこだわりのギヤに至るまで〝モノを中心とした旬な情報〟をたっぷりお届けします。

特集

戦う男たちの大いなる正装!

麗しのミリタリージャケット

モノマガ人の「冬のマストアイテム」と言えばやっぱりフライトジャケット! 人気のMA-1はもちろん、A-2、CWU-36Pの最新モデルもピックアップ。さらにはタンカースやデッキジャケットなど注目のミリタリージャケットも見逃せない。映画「トップガン」の大ヒットによりブーム再燃の気配が漂う戦闘服戦線に異状ありだ!

■うーん、うなるモノ ■モノ進化論 ■mono編集部のモノ差し

モノ・マガジン11-2特集号 NO.903
10月15日(土)発売 特別定価 750円(税込)

●モノ雑誌のパイオニア 毎月2回(2日・16日)発売
mono

発行人●今井今朝春
編集人●前田賢紀
発行所●株式会社ワールドフォトプレス
〒166-0004 東京都杉並区阿佐谷南1-12-1
アズ阿佐ヶ谷
TEL:03(6383)2331[編集部]
03(5929)7682[メディアビジネス部]
03(6383)2390[販売部]
FAX:03(6383)2583[編集部]
03(6304)9443[メディアビジネス部]
03(6383)2574[販売部]
印刷所●大日本印刷株式会社

●編集の都合上、内容が一部変更される場合もありますのでご了承ください。

●乱丁・落丁は送料小社負担にてお取り替えいたします。
●本文中の価格は消費税込みの総額表示です。
実勢価格は編集部調べの価格です。